

國學院大學學術情報リポジトリ

『惟宗光吉朝臣集』試論：歌枕を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: スピアーズ, スコット, Spears, Scott メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000186

『惟宗光吉朝臣集』試論

— 歌枕を中心に —

以前、惟宗光吉家集『惟宗光吉朝臣集』を軸に、光吉（文永十一年（一二七四）～文和元年（観応三年、一三五二）の一生を描いた^①。ただそこでは、『惟宗光吉朝臣集』そのものについて、論じるところが少なかった。本稿では、その全貌を論じるには至らないが、いくつかの特徴についてみることにする。

『光吉集』の成立について、従来説に加えるところはなく、井上宗雄が内部徴証から導き出した文和三年（一三五四）から延文三年（一三五八）十二月以前とするのが妥当だと考える^②。編者も、延文元年下命『新千載和歌集』寄人となった光吉男光之が最も有力候補であるが、確証が未だに得られていないの

スピアーズ スコット

は事実である。伝本は冷泉家時雨亭文庫本とその写本である宮内庁書陵部本の二つのみで、本文は書陵部本が書き留めた時雨亭文庫本虫損部分以外には差はないと思われる^③。構成としては類題集であり、春五三首、夏三〇首、秋五〇首、冬三二首、恋六〇首、雑八一首、全部で三〇六首ある^④。それぞれの部内の進行等からみても、概ね勅撰集に倣った作りだ。

さて、以下では、春部の冒頭歌・末歌の他、『万葉集』に由来し、そして俄かに中世に流行した歌枕を検討する^⑤。

のどけき春

まずは冒頭歌群をみる。

亀山殿にめされし千首歌の中に

一 しがらきのと山のかすみほのぼのと春にあげゆくよこ雲のそら

二 久方のそらぞのどけき春の日の影みる水やこほりとくらむ

彈正尹邦省親王家五十首に、霞

三 をさまれるみやこのそらのあさがすみかさねて春はのどけかるらし

一・二番歌は『亀山殿千首』(散逸)からのものだ。この千首は光吉が最も華々しく活躍した時代の、おそらく頂点にあたる機会だったと思われる。^⑥

二・三番歌は「のどけき春」を詠むものだが、二番歌は『古今和歌集』の次の二首が想起される。

はるたちける日よめる

紀貫之

二 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風や

とくらむ

桜の花のちるをよめる

きのものり

八四 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

そして、この冒頭歌群に対応するように、春の歌は「のどけき春」への思い出で終わる。

(二条前大納言家百首に)

五三 春の日をのどけきものとくらしきてやよひもけふになりにけるかな

このように、春歌は「のどけき春」を首尾とするが、一方、『光吉集』中、のどけきとは反対に、春の嵐を詠んだ歌が六首も数える。^⑦

聖護院二品法親王覚助家五十首に、夕鶯

六 春あさきあらしの日影くれ竹のこゑさへさむく鶯ぞなく

九 梶井二品法親王尊胤家歌に、檐梅
このもとはのきはの山のかげなれば松のあらしも梅
がかぞする

一一 ママ
香とめていかでとはまし梅のはなたがさとわかぬ春
のあらしに

亀山殿七百首に、花梢

二八 名のみして山はあらしもふかぬ日にこずゑのさくら
のどかにぞみる

同草庵（※稿者注、木寺の草庵）の花のちるを
みてよめる

四一 あらし吹く梢の雲のはれゆけばふりこそまされ花の
しら雪

大宰帥世良親王家歌に、おなじ心（※稿者注、
落花）を

四五 吹く風もそらにやさそふあらしやま雲にみだれてち
るさくらかな

この他、冬に二首、雑に一首みられ、参考のため左に掲げる。

元亨四年正月内裏の歌合に、落葉

一三七 ゆふぐれはみちたどるらしこの葉ちるあらしのす
ゑにかへる山人

一三八 紅葉ばもなみだながらやもろからむ老その杜にあ
らし吹くころ

おなじ心を（※稿者注、山家）

二二二 滝のひびき松のあらしになれゆくもうき世なれば
やさびしかるらむ

嵐の歌は珍しくはないが、特に『光吉集』では春への偏重が
多く、「のどけさ」とは対照的だ。

次、『光吉集』にみられる、特殊ともいふべき歌枕について
検討する。『光吉集』からの歌を掲げたあと、確認できる最初
の用例（始どが『万葉集』）をみた上で、光吉時代前後までの
主要な歌をみることにする。そして、それぞれの小括を加える。

をすて山

一六九 色にいでぬ袖の涙やしら玉のをすての山のまきの
した露

前歌の詞書「二条前大納言家日吉社奉納の百首に」を次ぐ。

二条前大納言とは二条為世を指す。

「をすてやま」の初見は『万葉集』の次の一首だ。

一二二四 安太部去 小為手乃山之 真木葉毛 久不見者

蘿生尔家里

あてへゆく をすてのやまの まきのはも

ひさしくみねば こけむしにけり

西本願寺本では「あて(安太)」を「あだ」と読む。諸説ある

ものの、結局所在不明の地だ。猶、『五代集歌枕』に同歌が見え、
そこでは紀伊とされ、同様に『夫木和歌抄』でも紀伊とするこ
とから、この説が中世以降定着したかと思われる。ちなみに、

『袋草紙』では「苔」の例歌として掲げる。また、この歌の異伝
歌が『古今和歌六帖』(四二八六番歌、二句目)をしほのやまの、

下の句「ひさしくみればこけおひにけり」、そして『続古今和
歌集』(一七四七番歌)にも「柿下人丸」のものとして登場する
(初句「としつもる」、第五句「こけおひにけり」)。『八雲御抄』
「山」中に「をすての」の項があり、「あしたゆく まきのは」と
注記する。^⑩

中世の歌にも登場する。

『信実集』

六九 経のれうしの百首に
しら玉のをすての山の秋の露つらぬくくさも今

や枯れなん

『壬二集』 (住吉三十首 夏五首)

一九九六 夕すずみ我が袖かへるあまを舟をすての山のま

きの下かぜ

藤原家隆の一首は明らかに万葉歌を踏まえたものだ。

『新撰和歌六帖』中にも、「まき」を詠んだ為家歌がある。

二四四二 見ずひさになりぞしにけるをすて山まきのふる

きの苔ふかきまで

『中書王御詠』（宗尊親王）に次の歌がみられ、「ぬれながらちる、順徳院御製被思出候」という、為家のものと思われる評が付されている。

（夕立）

七七 かぜはやきをすての山のゆふだちにこけながらちる
まきのした露

ちなみに、『夫木和歌抄』には、前掲万葉歌及び宗尊親王歌を「苔」に、「をすての山」の項では前掲家隆歌を掲げる。

最後に勅撰集をみる。管見に入るのは『統後拾遺和歌集』に入る次の二首のみだ。

（山月）

藤原基任

三四九 しら玉のをすての山の月影にみだれてみがく槇の
下露

光明峰寺入道前撰政左大臣家歌合に、

暮山雪

源有家朝臣

四八三 夕さればをすての山の苔の上に槇の葉凌ぎ積るし
ら雪

後者は『現存和歌六帖』にもみられる歌だ。

基本的に「をすてやま」は万葉歌を踏まえ、「こけ」「まき」もしくは「まきのは」を詠むものとして定着したようだ。そして光吉歌のように、それを発展させ「まきの下露」等の工夫もみられる。

ゐかひの山

二四〇 よませられ侍りし百首に、旅
いをやすみふすやゐかひの山にても旅にしあれば
ゆめもむすばず

『万葉集』には、次の二首がみられる。

但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遙望二御墓
一悲傷流涕御作歌一首

二〇三 零雪者 安播尔勿落 吉隠之 猪養乃岡之 塞為

卷尔

ふるゆきは あはになふりそ よなばりの ゐか
ひのをかの さむくあらまくに

(大伴坂上郎女跡見田庄作歌二首)

一五六一 吉名張乃 猪養山尔 伏鹿之 孀呼音乎 聞之

登聞思佐

よなばりの ゐかひのやまに ふすしかの つ

まよぶこゑを きくがともしさ

「ゐかひの山」は大和国磯城郡吉隠(ヨナバリ、現奈良県桜井市)にあるというが、「ゐかひのをか」は同地を指すと思われる。¹¹⁾前者は『袖中抄(あはゆき)』項、第三句「よごもりの」、第五句「せきにせまくに」、後者は『夫木和歌抄』(「鹿」)項にある。そして両首は『歌枕名寄』に入り、ともに大和国とされ、その理解が吉隠の所在と合致するようだ。¹²⁾後者の初句が「ふなばりの」とされることがしばしばみられ、『八雲御抄』「山中の項でも」「ふなはりの、鹿」とある。ちなみに同書「ゐかひの(丘)」項では「みこもりの、雪」とある。¹³⁾それほど多くの歌はみられないが、鎌倉時代に入ると、数首確認できる。まずは『新撰和歌六帖』「ざふの草」中の信実歌を掲げる。

一九四九 みまくさはくるともからんみこもりのゐかひの

をかのことのしげくさ

『歌枕名寄』では、前掲万葉歌と並んで、次の一首がみられる。

春雪

行家

二八九七

みごもりのゐかひの岡のせきもせずあはれや春の雪はきゆらん

そして『夫木和歌抄』では、右の万葉歌とは別に、次の一首が前掲『新撰和歌六帖』とともにみられる。

ゐかひのをか、猪養、大和

岡掃衣

後九条内大臣

九一七九

かるもかくゐかひの丘のさむきよはいもやすくねずうつころもかな

笠間時朝の家集『前長門守時朝入京田舎打聞集』にも一首みられる。

鹿

一九四 ふなばりのるかひの山の秋霧につまよびかねて鹿ぞなくなる

ここでは先ほど指摘した「よなばり」↓「ふなばり」の変動がみられる例だ。⁽¹⁵⁾

「丘」と「山」とでは若干詠法に違いが見いだせる。「丘」は寒さを中心として、「山」はむしろ妻恋や、光吉歌のように夢（そして旅のために残した人への思い）がみられる。

ささじま

聖護院二品法親王家五十首に、旅泊を

二四一 うきねして一夜はすぎぬささじまやいそこす波を袖にかけつつ

右の一首は『臨永和歌集』にも入る。聖護院二品法親王とは後嵯峨院皇子覚助法親王を指す。

「ささじま」の初見は『万葉集』の次の歌だ。

一二三六 夢耳 繼而所見 小竹嶋之 越磯波之

敷布所念

いめのみに つぎてみえつつ たかしまのい
そこすなみの しくしくおもほゆ

現在では「たかしま」と読むのがよいとされるようだが、西本願寺本では「ササシマ」とされ、これが歌書類にみられる読みだ。同歌は『五代集歌枕』、『夫木和歌抄』、『歌枕名寄』（いずれも上の句を「ゆめにのみつきて見ゆればささじまの」とする）にも採録される。『八雲御抄』書陵部本「嶋」項では「石 万 いそこす波 ゆめ」とみえるので、石見国（現・島根県）にあったという認識を示す。⁽¹⁶⁾『五代集歌枕』は所在について「国不詳」とし、『夫木和歌抄』も「ささじま」の項を設けるが、やはり「未国」とする。『歌枕名寄』では「小竹島 顕昭歌枕当国入之、一説伊勢国云云」とする。⁽¹⁸⁾

さて、作例に移るが、『万葉集』の後、『道助法親王家五十首』中の藤原光経の一首が初見だ（同歌は『光経集』及び『夫木和歌抄』にもみられる）。

〔島千鳥〕

七六七 ささ島の磯こすなみにたつ千どり心とぬれて鳴か
ぬよぞなき

次は順徳院の『紫禁和歌集』で、これも『夫木和歌抄』に採
録されている。

七七〇 冬の色よそれとも見えぬささ島の磯こす浪に千ど
りたつなり

時代が下り、鎌倉中期以降では、次の歌がみられる。

『宝治百首』 (島鶴) 藤原顕氏

三四一八 篠島の跡のしら波たづぞなく住むやみぎはの夜
寒なるらん

(『夫木和歌抄』に採録)

『顕氏集』 (中務少輔会)

島春駒

八七 かりてかふひとしなけれどささじまのあたりはなれ
でたてる春こま

〔秋風和歌集〕

十六首歌のなかに、寄島述懐といふことを
よみはべりける

前撰政左大臣(実経)

一一五八 ささじまやいそこすなみに袖ぬれて身のうきふ
しをいつかわすれん

『宗尊親王三百首』

二八〇 うき枕まだふしなれぬささ島の磯こす波の音のは
げしさ

『東撰和歌六帖』 抜粹本 (千鳥)

忠直

四〇八 夜を寒み浦風さやぐささじまの磯こす浪に衝鳴く
なり

『雅有集』 (春宮御方詩歌百首続題に)

千鳥

一二〇 おきつかぜあかつきかけてささじまのいそこすな
みにちどりなくなり

『自葉和歌集』 (中臣祐臣)

一八八 おきつかぜふかときけばささじまの月に磯こす
永仁五年に名所百首よみ侍りしに、月

秋のうら浪

『頓阿百首』A

旅泊

九七 あら磯に舟よせかねてささ島やいくよの波にうき沈むらん

時代は多少前後するが、ここで勅撰集にみられる例を提示する。

『続拾遺和歌集』

文永七年八月十五夜内裏三首歌に、

海月といふことを 右衛門督実冬

三〇八 ささ島やよわたる月の影さえて磯こす浪に秋風ぞ吹く

(『歌枕名寄』にも採録)

『続後拾遺和歌集』

文保百首歌奉りし時 前大納言為世

三七 しほかぜの音ばかりしてささじまの磯こす波もかすむ春かな

(『拾遺現藻和歌集』にも採録)

『続後拾遺和歌集』の為世歌は『文保百首』の歌だが、二つの間には差はない。

万葉歌の表現を用いて「磯こす(波、など)」を導き出すための表現として「ささじま」が登場することが定型となり、光吉歌もそれを踏襲する。

あべのた

関白家歌に、名所田

二七七 七十にすぎゆく老のさかこえてあべのたのものたのみなのみや

関白とは二条良基のこととみられる。

「あべの田」もしくは「あべのたのもの」の初見は『万葉集』の次の一首。

三五二三 佐可故要弓 阿倍乃田能毛尔 為流多豆乃 等

毛思吉伎美波 安須左倍母我毛

さかこえて あへのたのみに ゐるたつのともしききみは あすさへもがも

同歌は『俊頼髓脳』、『綺語抄』、『奥義抄』(第二句「あべのたのむに」)、『五代集歌枕』、『袖中抄』、『歌枕名寄』等と、多くの歌論書等にみられる。所在について、『五代集歌枕』は「国不定未勘国 其由見本集」とする一方、『歌枕名寄』は駿河国安倍市、『夫木和歌抄』は駿河とする。

『壬二集』に家隆の次の一首がみられ、明らかに万葉歌を下敷きとしている。

暁婦雁

二二七九 たづのゐるあべの田面の有明にまた坂越えてか
へる雁がね

『夫木和歌抄』では同歌は「光明峰寺入道撰政家会、暁婦雁」として「たづの啼くあべの田の面の明ぼのに又坂こえて帰る雁がね」(一六六九番歌)と、若干の違いを見せる形で載る。

『宝治百首』では、次の二首がみられる。

(婦雁)

頼氏

四五五 山風にそら行く雲も坂こえてあべの田面に帰るか
りがね

(早苗)

定嗣

九三八 坂こえて民はきにけりたづのあるあべの田のもの
さなへとるなり

また、宗尊親王も数首詠んでいる。

『柳葉和歌集』

文永二年潤四月三百六十首歌 秋

七二八 さかこえてみる人あれやたづのなくあべのたのも
の秋の夜の月

『夫木和歌抄』

あべの田 駿河

三百首御歌

中務卿のみこ

一〇一七二 さなへとるあべの田のものむらさめにさかこえて
なくほととぎすかな

『夫木和歌抄』には、宗尊親王主催歌合に詠まれた次の
歌もみられる。

中務卿親王家歌合、早苗 権僧正公朝
二五四一 日をおくるみちをくるしみさかこえてあべの田
のみにさなへとるらん

少し注目してよい歌としては次の『藤葉和歌集』の一首
がある。

(雪のうたに) 藤原盛徳
三六四 坂こえて今こそみつれはるばるとあべの田面につ
もる白雪

盛徳について井上宗雄の論考がある。⁽²⁰⁾光吉と同時代の人物で、
同じく二条派で活躍した歌人であり、のちに光吉男光之が増補
した『勅撰作者部類』を著述した。

最後に『延文百首』の藤原実夏歌を挙げる。

眺望
一八九八 はるばるとあべの田のをもをみわたせば坂こえて
こそたづも鳴くなれ

「あべのたのも」は田園風景、特に鶴のいる所として詠み、
そして光吉歌のように「頼む」を導き出すようにも用いられる。

にしかは

元亨三年七夕、亀山殿七百首歌講ぜられ
侍りけるに、寄鶴祝を

三〇六 にし河やみゆきのあとをかさねても千世とぞちぎ
る鶴の毛衣

『光吉集』の最後の一首だが、集冒頭の『亀山殿千首』と対
応するかのように、光吉が漢文拔を書いた『亀山殿七百首歌』
からの一首で、集は光吉の歌人としての栄光を最初と最後に飾
る形となっている。おそらく次の『古今和歌集』に入る宇多法
皇の歌を意識していると思われる。

法皇にし河におはしましたりける日、
つるすにたてりといふことを題にて
よませたまひける
九一九 あしたづのたてる河辺を吹く風によせてかへらぬ

浪かとぞ見る

西川は一般に桂川（大井川）を指し、右一首も同様だが、和歌に「西川」が直接詠み込まれることが少ないようだ。そのためか、あまねく桂川を指すとは限らない。

平安期のものとしては次の数例が確認できる。『実方集』では次の贈答がみられる⁽²¹⁾。

あき、みちつなの中將のきみを、あじろにさそひければ、

だうしむがり給ふほどよりはせしやうこのみ給ふこそ
とありければ

三四 うぢがはのあじろのひをもこの秋はあみだぼとけに
よるとこそきけ

三五 なみのよるうぢならずともにしかはのあみだにあら
ばいをもすくはん
返し

『殷富門院大輔集』にも西川を題材とする贈答がみられる。

つちみかどのうちの大きいどの、春ころこがの
さんざうに

一六七 ひさしくみ給ひたりしに
あゆはしるにしかはにのみすみつきて花の宮この
はるもすぎぬる

一六八 返し だいどの
はなみてもはかなきよのみおもほえてにしかはに
のみすむころかな

右の歌にみられる西川は桂川を指すと思われるが、同時にいずれも西方浄土にかける⁽²²⁾。

勅撰集では管見に入る確かな例は次の歌だが、趣を少々右のものとは異にする。

『続後撰集』

(おなじ心を) 皇太后宮大夫俊成
二二八 なるたきや西のかはせにみそぎせんいはこそ浪も
秋やちかきと

前々歌詞書に「百首歌たてまつりし時、六月祓」とあるこ

とから、ここは「六月祓」を題として詠まれたことがわかるが、出典は『千五百番歌合』である。ここで詠まれる西川とは仁和寺近くの鳴滝川（現・京都市右京区三室川）のようだ。⁽²³⁾ただし、『歌枕名寄』はこれと、次に掲げる『続古今和歌集』歌とともに「西河 或云是大井河也」と注記する。⁽²⁴⁾

同じ院にしかはにおはしましたりける日、

江松老といふ

ことを題にてよみ侍りける 参議伊衡

一六六一

江にふかくとしはへにける松なれどかかるみゆきは今日や見るらん

坂上是則

一六六二

このかはのいりえのまつはおいにけりふるきみゆきのことやとはまし

「同じ院」とあるのは前歌詞書にみられる亭子院則ち宇多法皇のことで、西川への御幸ののりの歌であるが、『古今和歌集』歌と同機会だろうか。後者は『是則集』と『万代和歌集』にもみられ、『是則集』（四二番歌）の詞書に「まつ、つる、かめ、さるえのまつおいたる、大井河の行幸に」とあることから、や

はりここにいう西川は大井川（桂川）だとわかる。

「西川」という言葉は歌に登場することが少ないものの、多くの場合はやはり桂川（大井川）を指すものの、他の川を指す場合もあり、注意が必要のようだ。

おわりに

本稿では、『光吉集』について、数カ所程度ではあるが、その特徴を部分的につかもうと試みた。春歌においては、はじめと最後は「のどけき春」をうたいながら、嵐をその間に登場させている。そこに矛盾を見出すこともできるだろう。しかし、私家集であるがために、歌人の秀作を伝えることが大切であり、このような矛盾を許容する必要もあろう。集全体を通して、勅撰集のように、それぞれの部（四季の進行等）が整えられているため、作品としては完成しているといえる。検討した歌枕を用いた歌についていえば、光吉は「和漢両才」といわれ、そこに彼の博学ぶりを示しているともいえるだろう。特に、『万葉集』に詠まれて以来、歌論等では注目されるものの、中世になるまで詠まれることが少ないものも多く、それを使いこなすことが光吉の歌人としての見所の一つだったともいえよう。

注

- (1) 『惟宗光吉とその生涯 — 『惟宗光吉朝臣集』を通して』『和歌文学研究』2012年6月
- (2) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝編 改訂版』(明治書院、昭和62年) 517頁
- (3) 冷泉家時雨亭文庫『冷泉家時雨亭叢書 第七十五卷 中世私家集十二』朝日新聞社、2008年) に同文庫本影印所収。異本注記において多少の差はみとめられるが、これについては同書久保田淳・小林一彦解題を参照されたい。
- (4) このほか、二六九番歌、二八六番歌詞書中に他者からの贈歌がみられる。歌の引用は古典ライブラリー提供『新編国歌大観』及び『歌書集成』(拾遺藻和歌集) に基づき、通し番号は『万葉集』は旧『国歌大観』番号、その他は『新編国歌大観』番号による(2023年8月現在アクセス)。
- (5) 注二井上著書236、237頁
- (6) 注二井上著書236、237頁
- (7) 三四番歌は「二条前大納言家百首に おもひいでもいまはあらしの山ざくらわが身の春はむかしすぎにき」とあって、「あらしやま」と「あらじ」をかけるので、除外した。
- (8) 『万葉集』注釈史にみられる所在地について鴻巣盛広『万葉集全釈第二冊』(大倉広文堂、昭和6年、伊藤博『万葉集釈注四』(集英社、一九九六年) を参照されたい。
- (9) 黒田章子『五代集歌枕 愛知文教大学叢書8』みずほ出版、2006年
- (10) 片桐洋一『八雲御抄 名所部 用意部』和泉書院、2013年
- (11) ジャパンナレッジ提供『角川古語大辞典』参照(2023年8月現在アクセス)
- (12) 鴻巣盛広『万葉集全釈 第一冊』(大倉広文堂、昭和八年) 参照
- (13) 注一〇片桐著書
- (14) 注一〇片桐著書
- (15) 長崎健・外村展子・中川博夫・小林一彦『前長門守時朝入京田舎打聞集全釈 知家集全釈叢書18』(風間書房、生成8年) には、『万葉集』諸本にみられる地名表記の異同等についての考察がある。
- (16) 『磯』でもみられるが、書陵部本の注記には「万」とあるだけ。注一〇片桐著書参照。
- (17) 注九黒田著書
- (18) 松田好夫『万葉集「小竹島」考』(『万葉』第11号、昭和29年4月) によると、「たかしま」の所在を近江国とする説があるが、「ささしま」とした場合「知多半島と渥美半島の間にある周囲五軒餘の島」ともいう。
- (19) 注九黒田著書
- (20) 井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』第七章「藤原盛徳(元盛法師)」笠間書院、平成19年
- (21) 『道信集』九六・九七番歌に同じ贈答がみられるが、両首に若干の違いがみられる。
- (22) 竹鼻績『実方集注釈 私家集集釈叢刊5』(貴重本刊行会、平成5年)、平田喜信・徳植俊之『道信集注釈 私家集集釈叢刊5』(貴重本刊行会、平成13年)、森本元子『殷富門院大夫集全釈』(笠間書房、平成5年) 参照
- (23) 佐藤恒夫『続後撰和歌集 和歌文学大系37』(明治書院、平成29年) 参照
- (24) 藤川功和・山本啓介・木村尚志・久保田淳『続古今和歌集 和歌文学大系38』(明治書院、令和元年) も大井川説をとる。

